甚吉森

高知県東部の最高峰。千本山の北にそびえる甚吉森。奈半利川の源流であり、年間降水量は4,000mmを超す。徳島県との県境の尾根はゆるやかで、魚梁瀬の山々をやさしくつつみこんでいるように見える。
千本山からは古い大きな切株が点在する尾根を北へ進み間伐跡地の中ピークを下ったコルで道を見おとさないように慎重に登って1ト谷をわたり、若い広葉樹林をちどりながら高度を上げていくとやがて空が広けて杉の巨樹が点在してくる。
巨杉を見上げながら登れば、大きなブナの大木に出会うとまもなく頂上にたどり着く。
千本山方面からえんえんと歩いてきた魚梁瀬の山の雄大さらにぐるっと見れたすと四国の東部の素晴らしい山々が目の前に広がり感激する。
遠いけれど、きっと「来てよかった」と思える静かな名峰である。

高知県東部最高峰

陰る雨を那賀川と奈半利川とに分ける

大分水嶺

那賀町

魚梁瀬

甚吉森

1423m

二等三角点 明治二十五年と刻まれた石標もある。

ブナ

巨杉が林立

シロモジやリョウブの若い広葉樹林

獣道あり。やぶこぎできついが登り可。

下りは見おとしやすい。まっすぐ行かない

最低鞍部のコルを少し上ると左に巻道入口がある。

コル

谷の瀬音がかすかに聞こえる

中のピーク 間伐の跡

モミ ツガ

間伐と実施した明かるい人工林

坂

中川林道への登山道

ヒメシャラが混る。

昔の人が伐った大きな切株で一休み。

大人が寝ころがる程大きなものもある。

広場

所々、古い道があるが中川と西川の間の尾根を進むこと。

槙の木がぽつぽつ

槙の尾根

ヌタ場

大きな切株がずっと続いて点在している。

馬路村の鳥 オオルリ

ツル シダ

ツルシダやマツカゼソウなどミカン科の植物には有毒物質があり、シカが食べない。

ヤナセスギ

足元ふわふわ

千本山

115 116

お林班界

千本山をすぎると尾根にはタヌキのタメ糞がタタく見られるようになる。

いろはにカエデ

あ アサヒカエデ
い イロハ
う ウリハダカエデ
え エンコウカエデ
お オオイタヤメイゲツ

山には三つの坂がある。
のぼり坂
くだり坂
そして
ま・さ・か。
思いもしないところでけつまずき、ウサギに笑われる。

甚吉森の尾根は西又山～おばけ杉～湯福丸へと延々と続いている。
なんともそそられる尾根だ。
いつか歩いてみたい。

あの森は甚だ吉なり!

門脇中納言平経教

クマの足跡は親指から小指まで地面につくので五本指となる。

ツキノワグマの生息する会山山系とつながる尾根なので、彼らの行動範囲。
彼らとは接触せずに遠くの友人として共存しよう。

馬路村のお年寄の中にはサトイモを「屋島イモ」と呼ぶ人もいる。
屋島の源平合戦に敗れた平家の落人がもたらしたことに由来している。

木地師と甚吉森の尾根

山から山へと漂泊を続けた山の民 木地師。
ろくろを使い、おわん、九膳杯、お盆などを作る木工技術集団。
中世の近江の山で生まれ全国の深山に良材を求めてさすらいながら生計を立て、明治の始め頃から姿を消していった。
木地師の本拠地、近江の筒井八幡宮は、何年かごとに「順国人」という巡遣者に全国を回らせ木地師から奉加を求める「氏子狩り」を行っており その記録から寛政九年(1797年)9月24日、甚吉森のある尾根を通って魚梁瀬に順国人が来た記録がある。
源平の昔から瀬戸内と魚梁瀬は確かにつながり木地師、山伏、猟師 杣人、鉱山従事者など山を生活の場とした人々がこの尾根を通って行った。
(四国百山より)

魚梁瀬六木
スギ
ツガサワラ
ヒノキ
モミ
ウラジロマキ

木地師

う～む この椀の出来は…

企談ながら安芸市との境にある穂己屋山(ほこや)(安芸側は横荒山保護林)の山名はかってこの一帯に住んでいた木地師たちが備荒作物である粟を栽培していた。粟を作る山の小屋が転じて穂己屋山となった説がある。

屋島や壇ノ浦の戦いに敗れた平家一族が四国山地の奥深く源氏の追手から逃れ敗走した。
人跡未踏の奥山に分け入り、断崖や激流を越え土佐の奥地へ落入していった。
壇ノ浦で戦死したとされる門脇中納言「平経教」は祖谷から那賀川をさかのぼり、徳弥印谷に入り、南に見える ゆるやかな山(甚吉森)を眺め「あの丸山がよい」「山上からの眺めがよく、甚だ吉なり」と言って一行を元気づけたとされ、千本山に向かって尾根道を進んだ。
山を下った谷を「一の谷」「二の谷」と命名し、付近に屋敷をかまえ、石仏の峰に薬師如来を安置して落人部落をつくった。
魚を取る「魚梁」を流したことから「魚梁瀬」の地名を残しここを門脇平家の祖の地と伝えられている。
(土佐の道 その歴史を歩く)より

千本山～甚吉森 約2～3時間。中川林道からのルートも有り。

山に行き山道を歩き、何かを感じる。しかし、帰ってくるとそれを忘れる。思い出すためにまた山へ行き山道を歩くそれを繰り返している。

山歩きの鉄則は無事に家まで帰ること。